



あきたのものづくりとデザイン2022 「つたわるものづくり」



11月18日、あきた芸術劇場ミルハスを会場に、県内の製造業、クリエイターなどを対象とし、会場とオンラインを合わせて41名が参加し、「あきたのものづくりとデザイン2022」を開催した。

このシンポジウムは、県内事業者のデザイン活用事例から自社商品の競争力強化等につなげることを目指すもので、当日は、五城目町の佐藤友亮氏、盛岡市の木村敦子氏2名の講師の活動紹介を通じて、多岐にわたるデザインの役割の1つである「伝えること」に焦点をあててお話しいただいた。

参加者からの質問も数多く寄せられ、活発な意見交換も行われた。



第一部 演題:「作るから伝えるへ」



講師

佐藤木材容器
代表 佐藤 友亮

下請け型の木製食器製造からの脱却を目指し、センターの平成31年度集中支援事業を活用し初の自社ブランドとなる木製皿「KACOMI」を開発した佐藤氏。その開発過程、開発後に積極的に参加している販売会や展示会での様子、コロナ禍での状況などを紹介した。

「誰かの為に作った商品を誰かに伝えられないのは、本末転倒。対面で伝えようとする中で得られた様々な気づきから、商品の魅力が伝わる言葉を見つけました。」などと語った。

第二部 演題:「伝わる機会を作る」



講師

北のクラフトフェア
実行委員長 木村 敦子

盛岡市でアートディレクターとして活動しながら、地域誌の制作や、その冊子制作を通してイベントや商品開発などを行ってきた木村氏。昨年10月に盛岡市内で開催し、実行委員長を勤めた「北のクラフトフェア」の成り立ちや当日の様子、開催成功に至った経緯なども紹介。これまでのさまざまな活動を振り返り「なぜ伝えようとするのか」という点につきまします。お客様の反応を見たいという点につきまします。喜んだり感心してくれれば嬉しいし次の動きへのモチベーションにもなります。反応が悪ければ、改善点が見つかって、次の伝える機会にも生かされます。」などと語った。

参加者の声

秋田市で造形作家をしながらショップ兼ギャラリーを構えています。講師の佐藤さんは同世代の作家仲間ですし、木村さんの企画したクラフトフェアに出展したご縁もあり、本日参加しました。

講演を聞いて感じたのは「やっぱり人なんだな」ということ。お客様がいる場所へ直接出向いて、自分の思いを知ってもらうことが大事ですし、そのためには自分の暮らしや秋田をもっと見つめ直さないといけないと、改めて感じる機会になりました。



h.u.g./and toiro
菅原 綾希子 さん